

不時着した霞ヶ浦訪問

70年ぶりに元米兵

太平洋戦争末期、土浦市上空で日日本軍に撃墜され捕虜になった元米兵パイロットが10日、70年ぶりに同市を訪れ、当時不時着した霞ヶ浦湖畔に足を運んだ。この地域の史実を調べている予科練平和記念館（阿見町）の歴史調査委員と共に現場を歩き、遠い記憶をたどりながら平和をかみしめた。



予科練平和記念館の歴史調査委員と笑顔で話す元米兵（右）＝土浦市手野町

歴史調査委員と湖畔歩く

「チャールズ！ よく来たな本当に！」。同日午前、調査委員の一人、赤堀好夫さん（79）は白髪の男性と対面を果たすと、手を取り笑顔で迎えた。男性は元米海軍少尉、チャールズ・ブラウンさん（91）。外務省の平和交流プログラムで家族ら5人と来県した。

ブラウンさんは1945年2月16日、爆撃機「SB2C」に乗り房総沖の空母を飛び立つて、日本本土への攻撃に参加した。当時20歳の青年にとって入隊後初の戦闘だった。

航空機の設計・実験を行っていた第一海軍航空廠（土浦市右帆）に編隊を組んで襲来。米軍の爆撃機に旧日本軍は対空砲で応戦し、ブラウンさんの機体に命中した。機体は同市手野町の霞ヶ浦西端の湖面に不時着。ブラウンさんは騒ぎを聞きつけた住民の舟で岸にたどり着き、憲兵によって連行され、大森捕虜収容所（東京）に収容された。

この日、案内した赤堀さんは湖岸で空につえをかざし、撃墜から不時着までの軌道を示して当時の状況を説明。ブラウンさんは「高度6千円で撃たれ、水上に不時着した。エンジンには火を噴いていたが水のおかげで消えた。けがはなかった」と回想した。

70年ぶりの訪問に「私の人生はここで変わった。当時を知っている人が来ているのは幸せなこと」とブラウンさん。「日米は互いに文化や社会を尊重し和解することが大事で、それは両国の希望だ。二度と戦争を起こさないように」と語った。町役場や記念館での交流を終え、赤堀さんは「立派な人だった。よく生き残った。（当時の歴史を調査していたので）対面できたことに運命を感じる」としみじみと話した。

（鈴木里末）